

擦文時代の遺跡分布の変遷について

塚本 浩 司

I. 最初に

擦文時代の遺跡分布に、時期による偏りがあることは土器編年研究の初期から指摘されてきた(駒井 1964など)。前半に石狩低地帯に遺跡が多いのに対して、後半になるとほとんどなくなり、一方でこれまで少なかった道東で増加する現象は、高杉博章氏(高杉 1982)、横山英介氏(横山 1990)、右代啓視氏(右代 1999)、中田裕香氏ほか(中田ほか 1999)などにより示された変遷図で基本的に確認できる。

小論では戦後公表された擦文時代の遺跡をできる限り網羅的に取り上げ、より細かい時期区分に基づく分布図を製作する。そして、図に示される変化を捉え、いくつかの考察を行う。

II. 分布図

対象とする時代は狭義の擦文土器(三浦 1994)を用いる時代とする。土器の時期比定は筆者の編年を用いるが、これの4期以降となる(塚本 2002)。1期から3期は北大Ⅲ式土器の問題とあわせて論を改める。

筆者の編年は器種の組み合わせで段階を捉えているために、出土量が十分でない遺跡では用いにくいという指摘もあろう。しかし、器種ごとの変化も押さえており、多くの遺跡では問題はない。ただ、破片しか見られないといった出土土器量の少ない遺跡も全体の傾向をつかむためには考察に加える必要がある。また、床面から土器が出土していない竪穴住居でも覆土や竪穴外の資料からできるだけ時期を決定したい。このため、編年を4・5期、6・7期、8・9期、10・11期というように2期ずつまとめて考えることとする。これで文様を持つ土器片が出土していれば、ほぼ時期を決めることができる¹⁾。ただし、明確にできる部分では、これまでの編年も適宜用いることとする。例えば、遺跡が拡散する時期は細かく押さえておきたい。前半期、後半期という場合は4期から7期と、8期から11期で分けている。

4・5期は9世紀～10世紀前葉、6・7期は10世紀中葉～11世紀前半、8・9期は11世紀後半～12世紀前半、10・11期は12世紀後半～13世紀前葉となる。年代幅に若干の差がある。宇田川洋氏の編年で(宇田川 1980)、4・5期が宇田川前期、6・7期が宇田川中期、8・9期が宇田川後期、10・11期が宇田川晩期におよそ対応する。

紀要前号の編年に関して修正がある。松前町・奥尻町の土器M 1は、松前町大尽内遺跡(報告

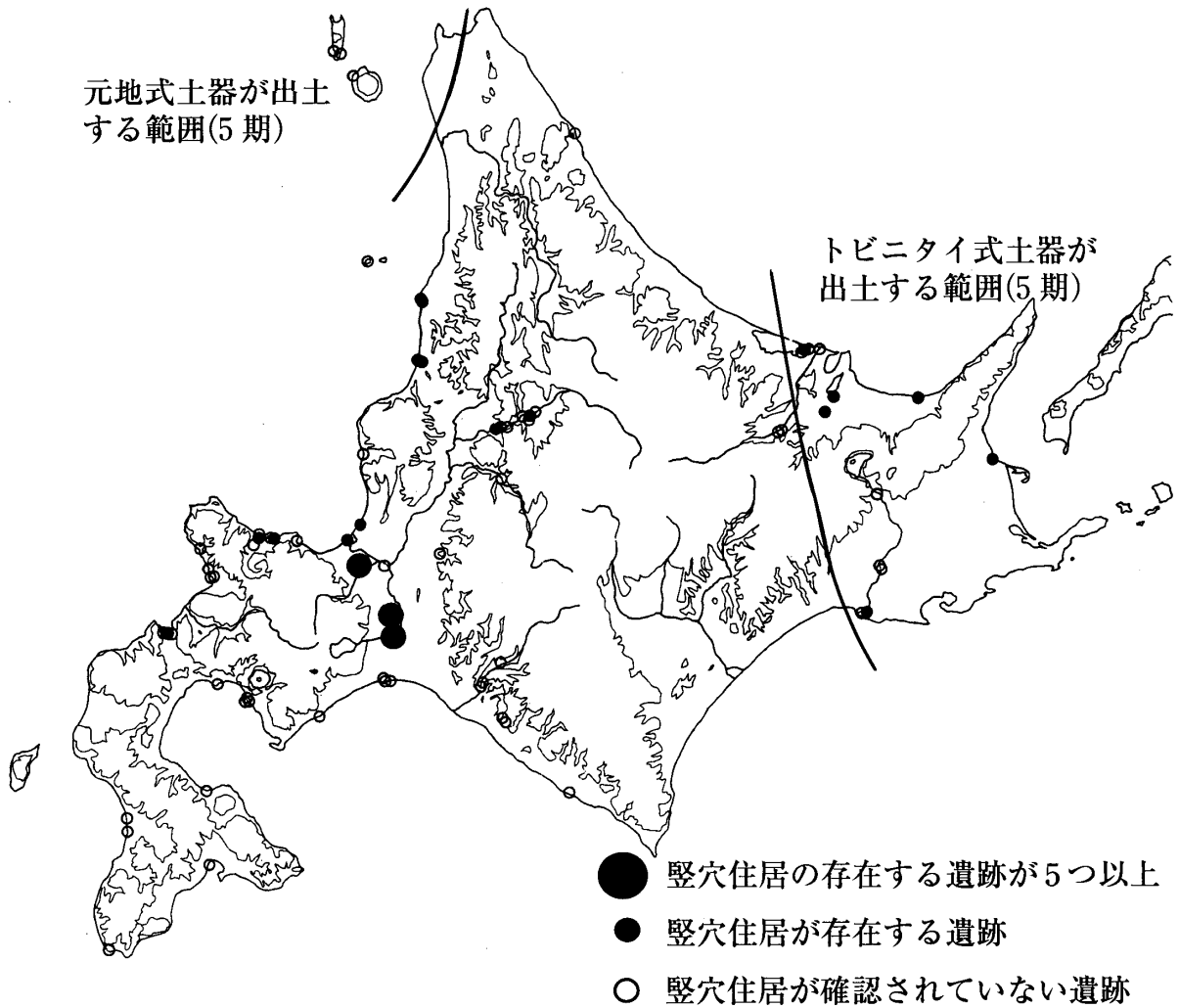


図1 4・5期の遺跡分布

書8202)でロクロ成形の土師器が出土しているので、時期は4期とするべきである。また、最も新しい段階の土器としたやや特異な壺形土器のM5については、M4期を中心とする奥尻町青苗遺跡(報告書8407)に類似するものが存在する。宇田川氏のいうように(宇田川2000)、中世の陶磁器に関係を想定できるようなものはない。硬質な焼成は青森県も含むこの地域では比較的よく見られる²⁾。こういったことから、M5の土器を独立させずM4に含め、M5期は削ることにする。

北海道を石狩低地帯・道央太平洋沿岸・道南日本海沿岸・日本海沿岸中部・日本海沿岸北部・石狩川上流・オホーツク海沿岸・道東太平洋沿岸に分けて考えていく³⁾。オホーツク海沿岸と道東太平洋沿岸をあわせて道東、これに日本海沿岸北部、石狩川上流を加えて北海道東部と呼ぶこともある。7期以降に土器の地域差が大きくなるが、石狩低地帯・道央太平洋沿岸・日本海沿岸中部、道南日本海沿岸、日本海沿岸北部・石狩川上流、オホーツク海沿岸・道東太平洋沿岸の4つの地域におおきくまとめることができる(塚本2002)。

出土土器が戦後から現在までに公表されている遺跡をできるだけ多く取り上げて考察する。市町

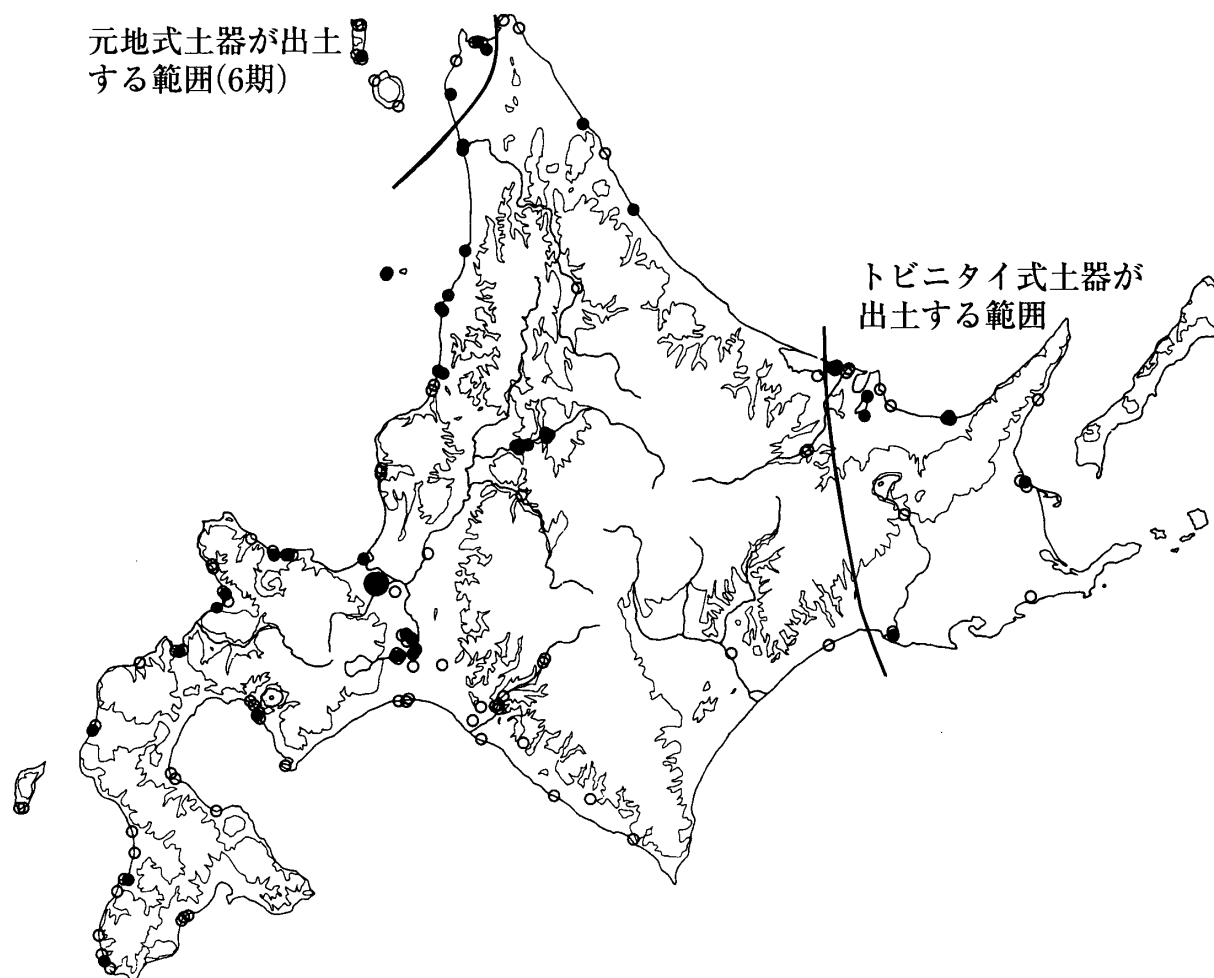


図2 6・7期の遺跡分布

村ごとに調査数が大きく異なっているため、遺跡の数が当時の状況ではなく、現在の発掘調査の頻度を表している可能性があるが、擦文時代に関しては竪穴住居が現在、もしくは近年までくぼみとして確認されている遺跡が多い。このため、当時の状況をかなり正確につかむことができると考える。

遺跡、さらには集落の範囲をどう捉えるかに関してはそれぞれ考える必要があるが、この問題には今回は立ち入らず、遺跡の範囲は報告にしたがっている⁴⁾。遺跡の性格は竪穴住居の有無だけで区別し、出土土器の量は示していない。また、竪穴住居を持つ遺跡は5遺跡を境にし、表示を区別している⁵⁾。

考察の対象とした遺跡、その文献を挙げた。入手できなかった文献があり、見落とした遺跡も多いであろう。今後、さらなる改善を加えるつもりである。ご教示をお願いしたい。

Ⅲ. 遺跡分布の変遷

遺跡の時期は表、分布の変遷は図1～4のようになった。北海道を大きく見て、変化を述べる。

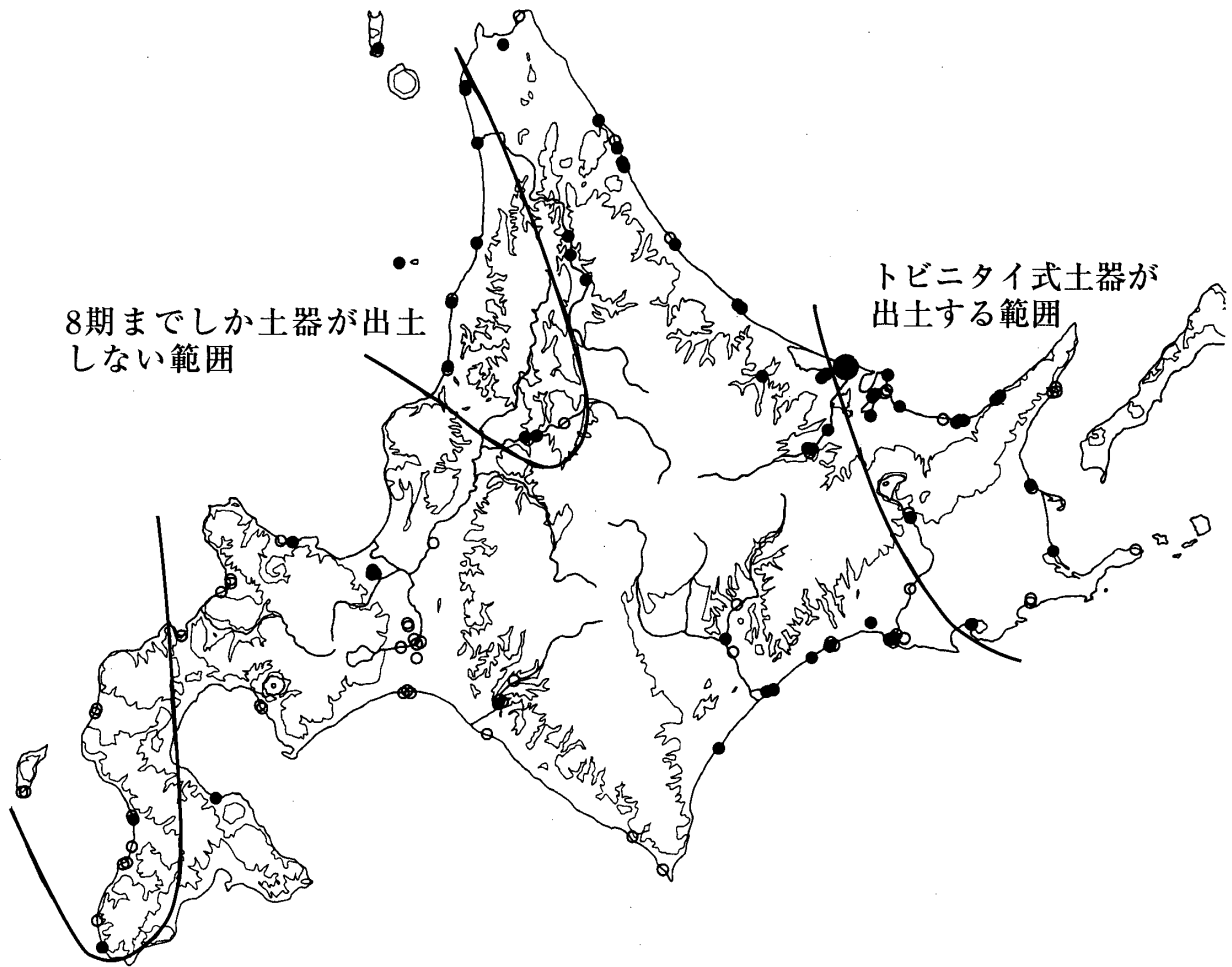


図3 8・9期の遺跡分布

3期までは石狩低地帯が遺跡の集中地であり、これよりも東ではほとんど分布していない⁶⁾。4・5期に入っても石狩低地帯の集中は変わらないが、4期になると石狩川上流や日本海沿岸北部の小平町・苫前町の河口部に竪穴住居が見られるようになる。5期は日本海沿岸北部・道東の広い範囲にまで広がり、オホーツク土器が擦文土器の影響を受け、元地式土器・トビニタイ式土器といった接触様式が生まれる(図1)。

6・7期は全道的に遺跡が広く見られ、前段階までほとんど分布しなかった道南日本海沿岸でも増加する。ただ、道東太平洋沿岸、特に十勝川流域では依然として少ない。日本海沿岸北部・石狩川上流部で竪穴住居数が増加し、最盛期となる。石狩低地帯でも引き続き遺跡は多い(図2)。

8期になると石狩低地帯で遺跡が激減し、以後竪穴住居はほとんど見られなくなる。一方、道東では増加し、太平洋岸でも遺跡が増え始める。現在でも竪穴住居のくぼみが多数残っている河口部の遺跡では、一部のみ調査が行われているだけだが、多くがこの時期以降の住居であることから⁷⁾、道東では8期に遺跡が激増していると考えることができる。9期になると中部を除く日本海沿岸と石狩川上流では土器がまったく出土しなくなり、擦文文化が周辺に先駆けて終了する(図

擦文時代の遺跡分布の変遷について

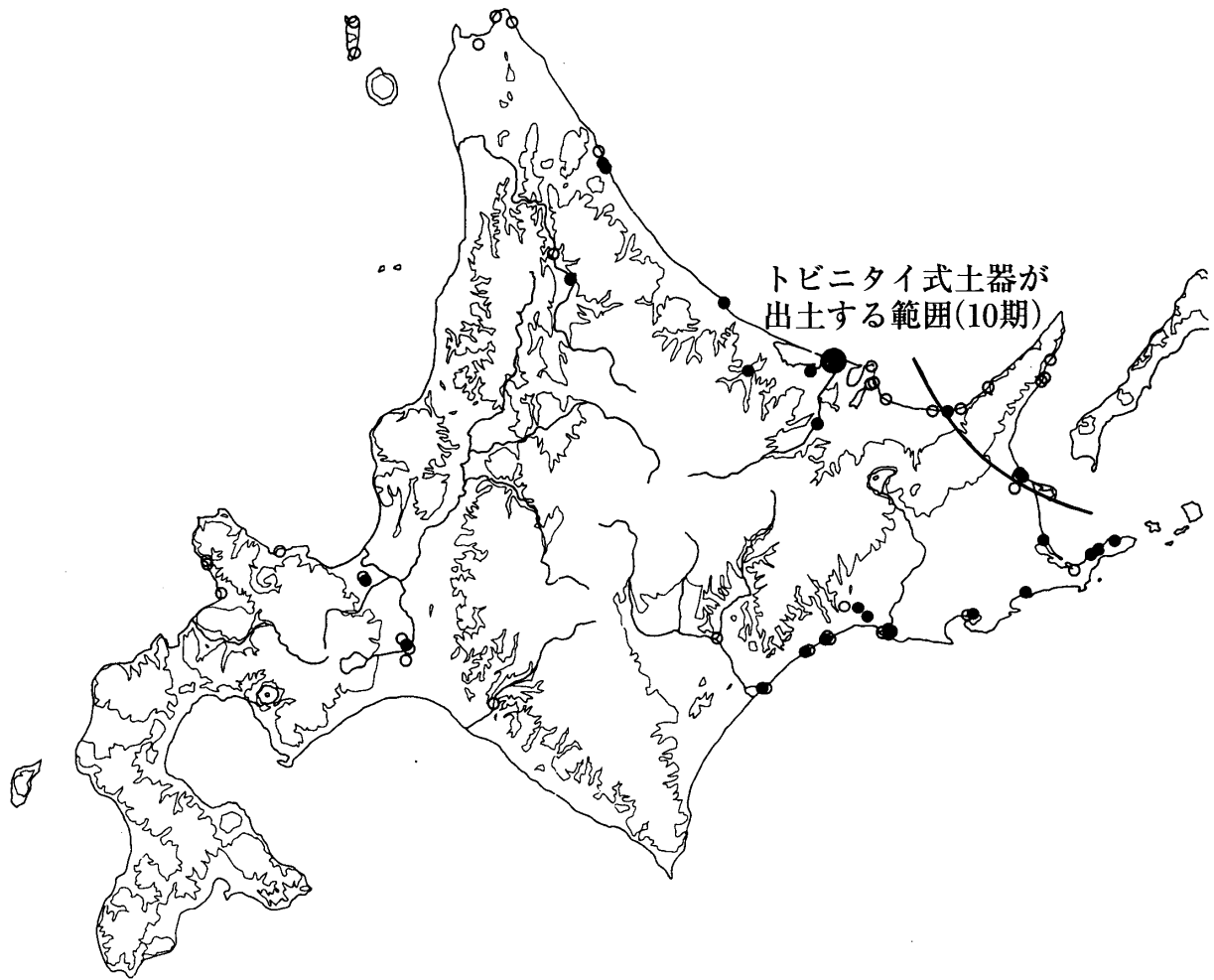


図4 10・11期の遺跡分布

3)。

10・11期は道東の内陸部で遺跡が少なくなり、海岸部に集中する。石狩低地帯では遺跡がごく少ない上に、出土する土器も少量である（図4）。

分布図から、これまでいわれてきたように前半期に石狩低地帯で遺跡が多く、後半期になると道東に多くなるという集中地の逆転現象が確認できた。この大きな画期が8期、つまり11世紀後半に起こったことが分かる。

他に、9期以降に道南日本海沿岸、日本海沿岸北部、石狩川上流で遺跡がまったく見られなくなることも大きな変化であるといえる。4期から徐々に東部へ拡散が始まること、5期にはほぼ北海道全域に遺跡が見られるようになること、6期に道南日本海沿岸で遺跡が増加し始めること、9期によく道東太平洋岸で増加が見られること、10期に道東の内陸部で遺跡が減少すること、道央太平洋沿岸では擦文時代にわたり遺跡が少ないことなどが指摘できる。

IV. 遺跡の拡大・ルートに関する研究史

分布図から明らかになった現象の背景・原因を考えなければならないが、今回はその中で東部への拡散の要因、8期に見られる大きな変化に関して若干の考察を行う。ただ、いくつかの指摘を行うにとどめ、さらなる分析は今後の課題とする。まず、この問題がどのように考えられてきたかを簡単に見ておく。

大井晴男氏は遺跡分布の時期による偏りが人の移動を反映していると解釈した。そして、その原因を人口の増大や資源の枯渇といった擦文集団内には求めることができないとし、奥州藤原氏の滅亡をきっかけとする本州の和人の侵入からの避難であると考えた（大井 1970）。さらに分布を仔細に検討し、拡大のルートは石狩低地帯から石狩川上流・日本海沿岸北部を経て最終的にはオホーツク海沿岸・道東太平洋沿岸に達し、移動しなかった集団はアイヌ文化に変化しているという。また、新しくなれば内陸にも遺跡が拡大すると述べた（大井 1984）。

前田潮氏は分布の偏りが西部での生活様式の変化や、擦文時代後半の土器型式の存続期間が、前半のそれに比べ相対的に長かったことによる見かけの現象であると指摘している（前田 1987）。

高杉氏は3つの時期の分布図を示し、時期による偏りを確認した。その背景を石狩低地帯で、擦文文化成立期からの本州との強い結び付きが維持できなくなったためであると考えているようである（高杉 1982）。

山浦清氏は北海道で鉄器が普及したことにより、石狩低地帯では平地式住居が採用され、遺跡が確認されにくくなったと考えた⁸⁾。一方、道東での増加は鉄器の交換品となる海獣の毛皮などの海産物獲得のために進出した結果とする。この2つが原因となって、遺跡の偏りが見られると考えた（山浦 1983）。海産物獲得を拡大の背景とする意見は中田氏も同じである（中田 1996）。

天野哲也氏は大井氏と同じく人の移動と解釈したが、その原因は資源の枯渇や白頭山-苫小牧火山灰の降下といった天災に求めた（天野 1987）。

右代氏は擦文時代を3段階に分け、7～8世紀に石狩低地帯までに限られていた遺跡が、9～10世紀には日本海からオホーツク海沿岸、道東太平洋沿岸にまで広がり、10世紀末～12世紀に道東で増加し、内陸部にも達すると述べた。その際、河口部から中流へと、次の河口部へというように2系統の移動戦略を取り、その背景に交易品としての海獣狩猟・漁撈を想定している（右代 1999）。

瀬川拓郎氏は石狩川上流の上川盆地では擦文時代の遺跡がそれ以前とは大きく立地を異にし、河川に近接して見られることから、サケの大量捕獲と処理を目的としていたと考える。この自給を超える捕獲は鉄などの交易の対価としてサケの重要性を意味していたと想定する。一方、日本海沿岸北部の河口部の集落は北海道内陸と本州を結ぶ交易港であるとされる。こういった結びつきの成立が日本海沿岸北部や石狩川上流に遺跡が拡大する条件であり、これまでの石狩低地帯の交易の独占が終了したことがきっかけとなっているとする。サケが重要であった石狩川上流部に対して、本州から距離のある道東ではより利益率の高い海獣の毛皮が重要であったと補足する（瀬川 1989）。

1996a : 1996b : 1997など)。

澤井玄氏は後半期になると本州との交易に対応するため、日本海沿岸北部ではサハリンの錦類や鷹の羽、道東ではサケの捕獲を目的として拡大したという。海獣狩猟はその痕跡がほとんど見られないために、擦文時代では盛んでなかったと考えている(澤井 1998)。

V. 拡散の背景と経路

東部への擦文文化の拡散の背景に多くの研究者がサケ・海獣の毛皮といった交易品獲得を目的としていたと説明している。しかし、海獣狩猟に関しては澤井氏、前田氏が指摘するように噴火湾沿岸や奥尻島など一部の地域を除き、狩猟具がほとんど出土せず、海獣骨もオホーツク文化の伝統を引くトビニタイ文化に関係する遺跡以外では少ない(澤井 1998 : 前田 2002 : 横山 1990)。東部全域で海獣狩猟が積極的に行われていたのかには疑問がある⁹⁾。

渡辺仁氏はコタンの立地から、アイヌ期においては河川中・上流域の産卵地でサケが捕獲され、河口部での漁撈は和人の技術が導入されるまで行われていなかったという(渡辺 1964)。擦文時代のテシ状遺構も大河川の支流に構築されており、技術的には大きく変わるものではなかったはずである。擦文時代の初期はこういった場所に集落が集中し、やや遅れて遺跡が拡大する石狩川上流の上川盆地でも同様であることから(瀬川 2001)、擦文時代の最初からサケが生業の基盤の一つであったと考えることができよう。

しかし、道東では河口周辺に大規模な竪穴住居群が見られ、これに比べると中流域の竪穴住居数はごく少ない。また、10期に内陸部の遺跡が減少するのは有利な場所を放棄するということになる。さらに、サケが多く遡上する十勝川流域では8期まで土器がほとんど出土せず、居住する人はごく少なかったと考えられる。こういったことから、サケや海獣などの交易品獲得が東部全域で拡散の要因であったと考えることはできないのではないか。

以上は拡散を一つの原因で説明しようとする問題点を指摘したのであり、擦文時代におけるサケ、交易の重要性を低く見積もるものではない。サケはまず越冬食料として重要であったのであり、当時の生態系が自給を超えるサケの捕獲に堪えられないほどぎりぎりであったと考えなければ、交易品を求めて道東に拡大するという想定にはつながらない。

道東への拡散にはいくつかの段階があり、大井氏のいうように(大井 1984)、一つのまとまりを持った動きではなかった。より新しくなると河川の中流部にも遺跡が進出するという意見も(右代 1999)、出土土器の時期から、内陸の集落の時期は6・7期、8・9期のものが多く、10・11期には減少しており、道東部では人が海岸部に集中する。近世アイヌ期は河川の中・上流部に集落が多く見られるので(煎本 1987 : 羽田野 1981)、道東においては立地の選択に断絶があったといえる。

VI. 8期の現象

遺跡の集中地が逆転する時期は8期にほぼ限定することができる。この劇的な変化は擦文社会で

の大きな変動によるもので、原因の解明は当時を理解する上で重要である。

石狩低地帯で異なる生活様式を採用した集団がいたために見かけ上、遺跡が少なくなったという解釈がある。山浦氏は平地式住居の普及を想定したのであるが（山浦 1983）、土器の出土量も激減しているのだから、生活様式全体の変化、つまり、アイヌ文化への移行がいつ始まったのかという問題になる¹⁰⁾。

鈴木信氏によるとアイヌ文化の生活用具は漆椀・木製容器・樹皮製容器・鉄鍋であり、擦文文化末期に成立したとされる（鈴木 1994）。出土例は少ないが内耳土器も重要であったかもしれない（宇田川 2000）。内耳土器を除き、これらは遺物としては残りにくい可能性があるのだから、出土しないことから直ちに8期に石狩低地帯でアイヌ文化が存在しなかったと結論付けることはできない。

石狩低地帯では10期になると高坏が消滅し、これに代わる木製椀が、11期になると大型長胴甕が消滅し、鉄鍋が普及したことが考えられる。擦文土器の終焉が本州産製品の普及によるものであるというこれまでの理解に従うと、10期から移行期に入る。

が、8期の時点で大きく変化した集団がいたと考えられるのであろうか。青森県でも基本的に11世紀ではまだ土器が使用されつづけていることを考えると、これを飛び越えて土器の必要がなくなるほどの木製椀・鉄鍋が、石狩低地帯のかなりの集団が入手していたと想定することは難しい。

北海道で竪穴住居から平地式住居への移行は擦文時代の後半から始まり、併存期がかなり長かった。道南の松前町札前遺跡で平地式住居への変化を追うことができ（報告書8204）、石狩低地帯の千歳市ユカンボシ C15遺跡では10期の擦文土器を伴う平地式住居が確認された（報告書0332）。一方、札幌市 K36遺跡タカノ地点では土器の製作が終了したと考えられる時期にも竪穴住居が使用されつづけ（報告書0118）、平取町二風谷遺跡など中世でも竪穴住居が平地式住居と併行して用いられていた（報告書0907）。とはいうものの、8期の段階で盛んに平地式住居が用いられていたことを示す遺跡は見られず、石狩低地帯でアイヌ文化に移行した集団が存在したとは考えにくい¹¹⁾。

それでは、西部から道東へ大規模な人の移動があった可能性を検討する必要がある。石狩低地帯では7期の段階まで遺跡が多いが、8期になると激減することから、移動があったとするならばかなり短い間の出来事であり、これは石狩低地帯と道東で類似した土器が出土するという現象に現れると予想できる。しかし、土器の分析からは7期では、長胴甕の文様では類似するが、口縁部や坏の形態で両地域の違いは大きく、8期になると地域差はさらに大きくなる（塚本 2002）。つまり、人の移動を積極的に導き出せない。

ほかの原因として、石狩低地帯での農耕的な生業の矛盾が拡大し、サケを求めて東への移動が引き起こったという意見がある（澤井 1998）。石狩低地帯での生業において農耕が具体的にどの程度の重要性をもっていたかは今後の課題であるが、すでに述べたように東北から土師器文化が流入した初期の段階から、サケを生業の基盤とする北海道的な適応をしており、8期以降に遺跡が増加する道東でサケの捕獲に有利な場所で遺跡が少ない。何らかの矛盾が移動を引き起こした可能性はあるが、その内容についてはさらなる検討が必要であろう。

擦文時代の遺跡分布の変遷について

天野氏のいうように火山灰の降下や人口の増大、資源の枯渇も原因の一つとして今後検討していく必要がある。ただ、石狩低地帯で一度遺跡が減少したのち再び増加することがなかった点をうまく説明できない。石狩低地帯での遺跡の減少、道東での増加の背景は、今のところ不明としかいようがない。当時の気候、サケ・海獣の捕獲量、本州での需要、北海道への鉄器の供給元はどこで、流入量はどれくらいであったのか、河口部の大遺跡の性格、アイヌ期との比較も含めて今後の課題としたい。

VII. 最後に

遺跡分布の変遷の背景に関する問題点を指摘するのみで、新しい解釈を提示することができなかった。今回はやや大きな範囲の議論を行ったのであるが、地域的に細かく分析することで新たな知見が得られるのではないかと考えている。

註

- 1) 時期決定の根拠をそれぞれ記載することはあまりに煩雑であるので省略する。
- 2) 青森県埋蔵文化財調査センター相馬信吉氏、青森市教育委員会木村淳一氏、中里町博物館齋藤淳氏に資料を実見させていただいた。
- 3) 地域の細かい範囲は表を見ていただきたい。
- 4) 調査主体が異なっても、同一名称の遺跡はまとめて取り扱っている。また、名称が異なっても、後の報告書で同一の遺跡とされているものもまとめた。
- 5) 遺跡が近接している地域では、表示の都合上一部ドットを省略している。
- 6) 3期の分布図は紀要前号の175ページに掲載している(塚本 2002)。
- 7) 大集落の出土土器は、中小の集落と異なり時期的に幅の広い土器が出土しているが、ほとんどは後半期のものである。
- 8) 鉄斧が採用されると、伐採の効率が上がり、燃料の供給が十分になる。このため、保温性が低い、快適な平地式住居が普及するという民族誌の事例から渡辺仁氏が導きだした説(渡辺 1984)に基づく考え。
- 9) ただし、文献には海獣の毛皮が律令国家にかなりの量持ち込まれていたことが記載されているので、捕獲地や入手先、狩猟方法、狩猟具の廃棄の仕方なども含めて考える必要がある。
- 10) 竪穴住居と土器の使用が特徴である擦文時代の後の文化をアイヌ文化としておく。
- 11) ただし、9期に日本海沿岸では他の地域に先駆けてアイヌ文化に移行したと考えられている。つまり、近接する地域では8期の直後に、より早いテンポで新しい文化に移行しているのである。渡辺氏は民族誌の事例から平地式住居の採用の時期に、貧富の差により違いがあったことを指摘していることもあり(渡辺 1984)、石狩低地帯で先進的な集団がいなかったと今の段階で完全に否定することはしない。

塚本浩司

表 擦文時代の遺跡の時期

文献は報告書一覧であたえた番号に対応している。

下線が引いてある時期には竪穴住居が見られる。

市町村	遺跡名	時期	文献
石狩低地帯			
札幌市	K36	<u>6・7</u> <u>8・9</u>	0105・0118
	北大構内	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8・9</u>	表註 1)
	K39	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8・9</u> <u>10・11</u>	表註 2)
	K113	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0114・0115
	K135	6・7	0108
	K441	<u>6・7</u> <u>8・9</u>	0106・0107
	K435	<u>4・5</u> <u>6・7</u> 8・9	0110
	K440	<u>4・5</u> 6・7	0128
	K446	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0103
	K460	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0104
	K496	6・7	0121
	K499	4・5 <u>6・7</u> <u>8・9</u> 10・11	0123
	K501	<u>4・5</u> 6・7 10・11	0123
	K503	6・7	0123
	N156	4・5	0122
	N162	<u>4・5</u>	0101
	N426	4・5	0109
	H37	4・5 6・7	0119
	H317	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0111
	S153	4・5	0102
	S505	4・5	0127
	T71	6・7	0112
恵庭市	中島松 5	4・5	0205・0207
	中島松 6	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0203
	中島松 7	4・5 6・7	0203・0207
	西島松南 B	4・5	0215
	西島松 18	4・5	0210
	南島松 2	<u>4・5</u>	0209

擦文時代の遺跡分布の変遷について

	南島松 4	4・5	0208・0209
	茂漁 4	<u>4・5</u> 8・9	0212
	茂漁 5	<u>4・5</u> 8・9	0213
	柏木川11	4・5	0206
	柏木川13	<u>4・5</u>	0202
	カリンバ 2	<u>4・5</u> <u>6・7</u> 8・9	0201・0204・0214
	ユカンボシ E 4	4・5 6・7	0216
	ユカンボシ E 5	6・7	0211
	ユカンボシ E10	10・11	0217
千歳市	ウサクマイ A	<u>4・5</u>	0306
	ウサクマイ B	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0301・0306
	ウサクマイ C	4・5	0306
	ウサクマイ D	4・5	0306
	ウサクマイ K	<u>4・5</u>	0303
	ウサクマイ L	6・7	0303
	ウサクマイ N	<u>4・5</u> 6・7 8・9	0302・0311・0334
	蘭越	4・5 <u>6・7</u>	0316
	蘭越 7	4・5	0311
	梅川 3	8・9	0310
	梅川 4	8・9	0315・0314
	ママチ	<u>4・5</u>	0320
	末広堅穴	<u>4・5</u>	0305
	末広	<u>4・5</u> <u>6・7</u> 8・9 10・11	0307・0308・0309・0312
	祝梅三角山 D	<u>4・5</u>	0304
	ユカンボシ C 2	<u>6・7</u>	0313・0326
	ユカンボシ C15	4・5 6・7 <u>10・11</u>	0331・0332・0333
	長都堅穴	8・9	0305
	オサツ 2	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	0313・0328・0329
	キウス 5	6・7	0330
	チプニー 1	4・5 6・7 8・9 10・11	0335
	美々 8	4・5 6・7 8・9 10・11	表註3)
	美沢 3	6・7	0322

塚 本 浩 司

江別市	後藤	4・5	0401
	大麻17	6・7	0402
北村	幌達布	6・7 8・9	8503
三笠市	桂沢	4・5	0501
芦別市	野花南堤防	4・5	0601
	野花南丸谷	6・7	0601
道央太平洋沿岸			
えりも町	エンルム	8・9	8504
様似町	(町内各地)	6・7 8・9	8504
浦河町	ウトマ川左岸	4・5	0701
	上野深	6・7	0702
静内町	春立	6・7	8504
新冠町	美宇	4・5 6・7	0801・8504
門別町	イタラッキ	4・5	0801
	エサンヌップ4	8・9	0802
平取町	二風谷	4・5 6・7 8・9 10・11	0907・0908
	二風谷小学校校庭	8・9	0906
	ピパウシ 2	10・11	0903
	カンカン 2	6・7 8・9	0905
	イルエカシ	6・7 8・9	0901
	額平川 2	4・5 6・7 8・9	0902
	荷負 2	6・7	0904
	岩知志	4・5 8・9	8504
日高町	左右府	6・7	8504
	富岡	6・7	8504
鶴川町	花岡 7	6・7	1001
穂別町	穂別第 5	6・7	1101
早来町	安平 D	6・7	1201
苫小牧市	静川26	4・5	1305
	柏原 5	6・7 8・9	1306
	柏原18	6・7	1305
	柏原24	8・9	1304
	ニナルカ	4・5 8・9	1303

擦文時代の遺跡分布の変遷について

	高丘	4・5	1301
	タップコブ	4・5 6・7 8・9	1302
白老町	アヨロ	4・5	1401
室蘭市	祝津	6・7	1501
伊達市	稀府川	4・5 6・7	1606
	南有珠7	4・5 6・7	1601
	有珠オヤコツ	4・5 6・7 8・9	1604
	ポンマ	<u>6・7</u>	1604・1605
	有珠善光寺2	4・5 6・7 8・9	1602・1603
虻田町	入江	6・7	1702
	高砂貝塚	6・7	1701
豊浦町	小幌洞窟	4・5	1703・1704
八雲町	コタン温泉	6・7	1802
	栄浜1	6・7	1801
森町	御幸町	4・5 6・7 <u>8・9</u>	1901
上磯町	東浜	4・5	2001・2002
石狩川上流			
深川市	東広里	<u>4・5</u> <u>6・7</u> 8	2103・2108
	納内町 B	6・7	2104
	納内町 O	6・7	2104
	東納内	<u>6・7</u> <u>8</u>	2101
	東納内2	6・7 8	2105
	納内6丁目付近	4・5 <u>6・7</u>	2107・2110
	納内3	4・5	2109
	内園2	6・7	2106
	境川左岸	4・5 6・7	2102
旭川市	錦町5	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	2201・2203・2206
	緑町4	<u>6・7</u>	2204
	旭町1	<u>6・7</u> 8	2212・2213
	近文町	4・5	2209
	永山4	4・5 8	2205・2208
	末広7	4・5	2207

塚 本 浩 司

	北門町 3	<u>6</u> ・7	2202
	神居古潭	4・5 <u>6</u> ・7 <u>8</u>	2205・2210・2211・2214
日本海沿岸中部			
浜益村	川下地区	6・7	2301
	柏木地区	4・5 6・7	2301
	岡島洞窟	6・7	2301
厚田村	聚富士上	<u>4</u> ・5	2401
石狩町	ワッカオイ	<u>4</u> ・5 <u>6</u> ・7	2501
小樽市	手宮洞窟	4・5	2604
	忍路 5	6・7	2607
	忍路11	6・7	2601
	忍路24	6・7	2606
	チブタシナイ	<u>4</u> ・5 6・7	2605
	チブタシナイ 2	6・7	2606
	蘭島	4・5	2602
	蘭島餅屋沢	<u>4</u> ・5 6・7 <u>8</u> ・9 10・11	2603・2606
余市町	大川	<u>4</u> ・5 <u>6</u> ・7 8・9	表註4)
	入舟	4・5 6・7	2701・2705
仁木町	モンガク A	4・5	2801
古平町	浜町	6・7	2901
神恵内村	観音洞窟	4・5 6・7 10・11	3002・3003・3004
	観音 2号洞窟	6・7 10・11	3001
泊村	渋井	4・5 6・7	3101
	ヘロカルウス	8・9	3103・3104・3105
	堀株 1	4・5	3106
	堀株 2	<u>6</u> ・7	3106
	堀株神社	4・5 6・7 8・9 10・11	3102
共和村	発足岩陰	6・7	3201
	宮丘 1	6・7	3202
岩内町	下リヤムナイ	<u>6</u> ・7 8・9	3301
寿都町	朱太川右岸河口	4・5 6・7	3401・3403
	朱太川右岸 1	4・5 6・7	3402

擦文時代の遺跡分布の変遷について

	朱太川右岸 6	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	3402
	朱太川左岸河口	8・9	3402
島牧村	チャランケチャシ	6・7	3501
日本海沿岸北部			
留萌市	三泊漁港	6・7	3602
	コタン浜	6・7	3601
小平町	高砂	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8</u>	3702・3703
	高砂第二地点	<u>4・5</u> <u>6・7</u>	3701
	小平中学校横高台	6・7 8	3702
苫前町	香川 B 地点	8	8506
	香川三線	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8</u>	3801・3802
	香川 6	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8</u>	3802
羽幌町	チライベツ	<u>6・7</u>	3904
	天売 6	<u>6・7</u>	3906
	天売 2	<u>4・5</u>	3906
	天売島第4地区	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8</u>	3902・3903・3905
	天売 A	<u>6・7</u>	3901
初山別村	初山別	<u>6・7</u> <u>8</u>	3907
天塩町	川口基線	<u>6・7</u>	4001・4002
	川口基線 A	6・7	4006・3906
	天塩川口	<u>6・7</u> <u>8</u>	4003・4004・4005・4007
豊富町	豊富	<u>6・7</u> <u>8</u>	4101
	豊里	<u>8</u>	8501
稚内市	抜海岩陰	6・7	4202
	声間大沼	<u>6・7</u>	4203
	声間川大曲	6・7	4205・4206
	声間大字下声間	6・7	4202
	シュンプトゥ湖右岸	10・11	4202
	恵北	<u>6・7</u> <u>8</u>	4203
	オンコロマナイ貝塚	6・7 8・9 10・11	4201
	豊岩 7	6・7 10・11	4204
利尻富士町	沼浦海水浴場	6・7	4301

塚本浩司

利尻町	マタワッカ	4・5	8502
	種屯内	6・7	4401
礼文町	浜中2	6・7	4504
	重兵衛沢2	10・11	4503
	ナイロ	6・7	8502
	香深井A	<u>6・7</u> 8	4502
	香深井5	4・5 6・7 8	4505
	香深井6	6・7 10・11	4506
	元地	4・5 6・7	4501
	イノウ崎	6・7	8502
オホーツク海沿岸			
美深町	楠	<u>8・9</u>	4602
	紋穂内	<u>8・9</u> 10・11	4601
名寄市	智東A	6・7	4702
	智東H	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	4701
浜頓別町	日の出	<u>6・7</u> <u>8・9</u>	4801
枝幸町	目梨泊	8・9	4906
	落切川左岸	6・7 <u>8・9</u> 10・11	4907
	ホロナイボ	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	4902・4903
	ウエンナイ2	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	4904・8505
	岡島附近	4・5	4901
	ホロベツ砂丘	6・7	4905
雄武町	雄武竪穴群	<u>6・7</u> <u>8・9</u>	5002・5003
	沢木船着場	8・9	5001
紋別市	ウブナイ	<u>8・9</u>	5102
	オムサロ台地竪穴群	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5103
	栄	<u>8・9</u>	5101
遠軽町	寒河江	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5201・5202
佐呂間町	HS - 06	<u>8・9</u>	5301
	HS - 05	6・7	5302
	浜佐呂間I	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5302
常呂町	TK07	<u>10・11</u>	5413

擦文時代の遺跡分布の変遷について

	常呂川河口	4・5 <u>8・9</u> 10・11	5418・5419・5420
	トコロチャシ跡	6・7 8・9	5402・5404
	トコロチャシ南尾根	6・7 <u>8・9</u> 10・11	5409・5414
	TK67	<u>8・9</u>	5415
	朝日トコロ貝塚	8・9 <u>10・11</u>	5403
	栄浦第一	4・5 <u>6・7</u> <u>8・9</u>	5403・5408・5417
	栄浦第二	4・5 <u>6・7</u> <u>8・9</u> 10・11	5403・5405・5412・5417
	常呂 (ST -08)	4・5 <u>8・9</u>	5416
	岐阜第一	<u>8・9</u>	5403
	岐阜第二	<u>4・5</u> <u>6・7</u> <u>8・9</u> <u>10・11</u>	5405・5410・5411
	岐阜第三	<u>6・7</u> <u>8・9</u> <u>10・11</u>	5406
	ライトコロ川口	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5407
	ライトコロ右岸	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5401
	ワッカ	8・9 <u>10・11</u>	5405
端野町	広瀬	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5501
北見市	川東15	4・5	5611
	南町	6・7 8・9	5606・5607・5608・5609・5610
	中ノ島	<u>8・9</u>	5604
	川田	4・5 6・7 8・9	5601・5602
	開成4	8・9	5605
	北上平地	<u>8・9</u>	5603
網走市	美岬4	<u>8・9</u>	5706
	能取岬西岸	10・11	5706・5707
	モヨロ貝塚	6・7 8・9 10・11	5705・5708・5402
	大曲2	8・9 10・11	5704
	嘉多山	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	5702
	嘉多山3	<u>6・7</u> <u>8・9</u>	5703
	北浜イナウウシ竪穴群	<u>10・11</u>	5701
女満別町	湘南	<u>8・9</u>	5801
	元町	<u>4・5</u>	5801
	豊里	6・7	5801
美幌町	元町2	<u>4・5</u>	5901

塚 本 浩 司

斜里町	トーツル沼 1	8・9 10・11	6009
	ピラガ丘	6・7 8・9	6001
	ピラガ丘第Ⅱ地点	6・7 8・9 10・11	6002
	ピラガ丘第Ⅲ地点	4・5 6・7	6003
	ウナベツ川	10・11	6004
	須藤	6・7 8・9	6005
	オンネベツ川西側台地	8・9	6007
	オタモイ 1	8・9 10・11	6006
	オシャマツ川	8・9	6008
道東太平洋沿岸			
大樹町	ホロカヤントー晩成地区	8・9	6101
浦幌町	十勝太若月	8・9 10・11	6202・6203
	十勝太海岸段丘	8・9 10・11	6201・6204
豊頃町	十弗 (No.38)	6・7 8・9	6301
池田町	池田 A 地区	10・11	6401
	常盤共同牧場	8・9	6401
	池田 3	8・9	6402
音別町	ノトロ岬	8・9 10・11	6501・6502
	チノミ	10・11	6502
白糠町	和天別河口	6・7 8・9 10・11	6601・6602・6604
	刺牛チャシコツ	8・9 10・11	6601
	坂ノ岡	8・9 10・11	6603
阿寒町	殉公碑公園	10・11	6701
	下仁々士別	10・11	6702・6703
釧路市	北斗	8・9 10・11	6804・6805・6815
	幣舞	4・5 8・9 10・11	6803・6810・6812
	材木町 5	8・9 10・11	6807・6808
	鶴ヶ袋 4	8・9	6811
	富士見町	8・9	6815
	貝塚町一丁目	6・7 10・11	6815
	東釧路	10・11	6814・6815
	東釧路貝塚	10・11	6809

擦文時代の遺跡分布の変遷について

	緑ヶ岡	<u>4・5</u> <u>6・7</u> 8・9 10・11	6801・6815
	緑ヶ岡 1	8・9	6802
	STV	<u>10・11</u>	6813
	興津	10・11	6806
標茶町	塘路	4・5	6801
	二股	4・5	6901
	トブー	8・9	6902
弟子屈町	下鋤別	4・5 6・7 8・9	7001
	矢沢	<u>8・9</u>	7002
釧路町	保別川左岸 I	<u>8・9</u>	7101
厚岸町	下田ノ沢	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	7201
	子野日公園	10・11	6815
浜中町	姉別川流域竪穴群	6・7 8・9	7301
	姉別川17	8・9 <u>10・11</u>	7302
根室市	穂香竪穴群	<u>10・11</u>	7405・7406
	温根湯	10・11	7401
	サンコタン	<u>10・11</u>	7402
	西月ヶ丘	<u>10・11</u>	7403・7404・8505
	トーサムポロ	8・9	7403
別海町	浜別海	<u>8・9</u> <u>10・11</u>	7501
中標津町	俵橋	10・11	7501
標津町	伊茶仁	<u>6・7</u> <u>8・9</u>	7606
	伊茶仁カリカリウス	<u>4・5</u> <u>10・11</u>	7601・7603
	伊茶仁チシネ第 2	<u>10・11</u>	7601
	伊茶仁チシネ第 3	6・7 8・9	7605
	伊茶仁ふ化場第 1	6・7	7602
	会津藩陣屋跡	10・11	7604
羅臼町	舟見町高台	8・9 10・11	7702
	オタフク岩洞窟	8・9 10・11	7703
	オルマップ川左岸	10・11	7701
	春莉古丹第 1 チャシコツ	6・7	7701

塚 本 浩 司

	トビニタイ	8・9	5402
	ルサ	10・11	5402
道南日本海沿岸			
瀬棚町	南川	<u>6・7</u>	7802
	南川 2	8	7803
	利別川河口	6・7 8	7801
乙部町	元和 8	6・7 8	7901
	小茂内	<u>8</u>	7902
	権現山	4・5	7903
江差町	厚沢部川河口	4・5 6・7	8001・8002
	法華寺坂	8	8003
上ノ国町	笹浪屋敷	8	8102
	竹内屋敷	8	8104
	洲崎館跡	<u>6・7</u>	8103
	四十九里沢 A	6・7	8101
	ワシリチャシ跡	6・7	8105
松前町	大尽内	4・5	8202
	札前	<u>6・7 8</u>	8204・8205・8206
	静浦 D	6・7	8201
	高野	6・7	8208
	原口館	6・7 8	8207
	白坂	8	8203
福島町	吉岡	6・7	8302
	穂内館	6・7	8301
	吉野	6・7	8301
奥尻町	青苗	6・7 8	8401・8402・8404・8405・8406・8407
	青苗 B	6・7 8	8403

表註

- 1) 0130・0131・0132・0133・0134・0135・0136
- 2) 0113・0116・0117・0120・0124・0125・0126・0129
- 3) 0317・0318・0319・0321・0322・0323・0324・0325・0327
- 4) 2702・2703・2704・2706・2707・2708

擦文時代の遺跡分布の変遷について

<引用・参考文献>

- 天野哲也 1987 「本州北端部は擦文文化圏にふくまれるか」森浩一編『考古学と地域文化』（同志社大学考古学シリーズⅢ）pp.529-544, 京都：同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 煎本 孝 1987 「沙流川流域アイヌに関する歴史的資料の文化人類学的分析：C.1300-1867年」『北方文化研究』第18号, 1-218。
- 右代啓視 1999 「擦文文化の拡散と地域戦略」『北海道開拓記念館研究紀要』第27号, 23-44。
- 宇田川洋 1980 「擦文文化」野村 崇・菊地俊彦編『北海道考古学講座』pp.151-182, 札幌：みやま書房。
- 宇田川洋 2000 『増補アイヌ考古学』札幌：北海道出版企画センター。
- 大井晴男 1970 「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』第4号, 21-70。
- 大井晴男 1984 「擦文文化といわゆる「アイヌ文化」との関係について」『北方文化研究』第15号, 1-201。
- 駒井和愛 1964 「擦文土器とオホーツク土器」東京大学文学部『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻』, 152-167。
- 澤井 玄 1998 「北海道北東部における擦文文化の拡散と終末について」野村 崇先生還暦記念論集編集委員会編『北方の考古学』pp.383-393, 富良野市：野村 崇先生還暦記念論集刊行会。
- 鈴木 信 1994 「中世・近世」『北海道考古学』第30輯, 55-66。
- 瀬川拓郎 1989 「擦文時代における食糧生産・分業・交換」『考古学研究』第36巻第2号, 72-97。
- 瀬川拓郎 1996a 「擦文文化の終焉」『物質文化』61, 1-17。
- 瀬川拓郎 1996b 「神居古潭竪穴住居遺跡の成立をめぐって」『旭川研究〈昔と今〉』第10号, 69-80。
- 瀬川拓郎 1997 「擦文時代における交易体制の展開」『北海道考古学』第33輯, 19-26。
- 瀬川拓郎 2001 「上川盆地におけるサケの生態と漁法」『旭川市博物館研究報告』第7号, 1-15。
- 高杉博章 1982 「擦文文化の終焉」『史学』第五二巻第二号, 109-131。
- 塚本浩司 2002 「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室紀要』第17号, 145-184。
- 中田裕香 1996 「北海道の古代社会の展開と交流——〇～一三世紀——」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』（古代の王権と交流1）pp.141-168, 東京：名著出版。
- 中田裕香ほか 1999 「擦文土器集成」日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会『海峡と北の考古学 シンポジウム・テーマ2・3資料集Ⅱ』, 287-322。
- 羽田野正隆 1981 「十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷—江戸時代後期を中心に—」『北方文化研究』第14号, 173-198。
- 前田 潮 1987 「北海道の内耳鍋について」『北方狩猟民の考古学』pp.161-190, 東京：同成社（初出は1976年）。
- 前田 潮 2002 「擦文文化の銚頭について」前田 潮『オホーツクの考古学』（ものが語る歴史シリーズ⑦）pp.47-75, 東京：同成社。
- 三浦圭介 1994 「古代東北地方北部の生業に見る地域差」日本考古学協会編『北日本の考古学 南と北の地域性』pp.149-174, 東京：吉川弘文館。
- 山浦 清 1983 「オホーツク文化の終焉と擦文文化」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第2号, 157-179。
- 横山英介 1990 『擦文文化』東京：ニュー・サイエンス社。
- 渡辺 仁 1964 「アイヌの生態と本邦先史学の問題」『人類学雑誌』第七十二巻第一号, 9-23。
- 渡辺 仁 1984 「竪穴住居の廃用と燃料経済」『北方文化研究』第16号, 1-41。

<発掘調査報告書>

報告書は基本的に発行所でまとめ、区別のため必要なもの以外、副題・シリーズ名は省略した。遺跡の所在地ごとにまとめている。ただ、近隣の市町村にまたがって遺跡が記載されている報告書は、発行所の所在地に載せている。

〔石狩低地帯〕

札幌市

- | | | | |
|------|----------|------|-------------------------------|
| 0101 | 札幌市教育委員会 | 1974 | 『N162遺跡』。 |
| 0102 | 札幌市教育委員会 | 1976 | 『S153遺跡』。 |
| 0103 | 札幌市教育委員会 | 1979 | 『K446遺跡』。 |
| 0104 | 札幌市教育委員会 | 1980 | 『K460遺跡』。 |
| 0105 | 札幌市教育委員会 | 1987 | 『K36遺跡』。 |
| 0106 | 札幌市教育委員会 | 1989 | 『K441遺跡北33条地点 N12遺跡』。 |
| 0107 | 札幌市教育委員会 | 1989 | 『K441遺跡 北34条地点』。 |
| 0108 | 札幌市教育委員会 | 1990 | 『K135遺跡 西5丁目通地点』。 |
| 0109 | 札幌市教育委員会 | 1992 | 『N426遺跡』。 |
| 0110 | 札幌市教育委員会 | 1993 | 『K435遺跡』。 |
| 0111 | 札幌市教育委員会 | 1995 | 『H317遺跡』。 |
| 0112 | 札幌市教育委員会 | 1995 | 『T71遺跡』。 |
| 0113 | 札幌市教育委員会 | 1995 | 『K39遺跡 北11条地点』。 |
| 0114 | 札幌市教育委員会 | 1995 | 『K113遺跡 北34条地点』。 |
| 0115 | 札幌市教育委員会 | 1996 | 『K113遺跡 北35条地点』。 |
| 0116 | 札幌市教育委員会 | 1997 | 『K39遺跡 大木地点』。 |
| 0117 | 札幌市教育委員会 | 1997 | 『K39遺跡 長谷工地点』。 |
| 0118 | 札幌市教育委員会 | 1997 | 『K36遺跡 タカノ地点』。 |
| 0119 | 札幌市教育委員会 | 1998 | 『H37遺跡 栄町地点』。 |
| 0120 | 札幌市教育委員会 | 1998 | 『K39遺跡 緑化地点』。 |
| 0121 | 札幌市教育委員会 | 1999 | 『K496遺跡』。 |
| 0122 | 札幌市教育委員会 | 1999 | 『N156遺跡』。 |
| 0123 | 札幌市教育委員会 | 1999 | 『K499・K500・K501・K502・K503遺跡』。 |
| 0124 | 札幌市教育委員会 | 2000 | 『K39遺跡 第8次調査』。 |
| 0125 | 札幌市教育委員会 | 2001 | 『K39遺跡 第6次調査』。 |
| 0126 | 札幌市教育委員会 | 2001 | 『K39遺跡 第7次調査』。 |
| 0127 | 札幌市教育委員会 | 2002 | 『S505遺跡』。 |
| 0128 | 札幌市教育委員会 | 2002 | 『K440遺跡』。 |
| 0129 | 札幌市教育委員会 | 2002 | 『K39遺跡 第9次調査』。 |
| 0130 | 北海道大学 | 1983 | 『北大構内の遺跡2』。 |
| 0131 | 北海道大学 | 1984 | 『北大構内の遺跡3』。 |
| 0132 | 北海道大学 | 1986 | 『サクシュコトニ川遺跡』。 |
| 0133 | 北海道大学 | 1988 | 『北大構内の遺跡6』。 |
| 0134 | 北海道大学 | 1989 | 『北大構内の遺跡7』。 |
| 0135 | 北海道大学 | 1990 | 『北大構内の遺跡8』。 |
| 0136 | 北海道大学 | 2002 | 『北大構内の遺跡XⅡ』。 |

擦文時代の遺跡分布の変遷について

恵庭市

- 0201 恵庭市教育委員会 1987 『カリンバ2遺跡』。
 0202 恵庭市教育委員会 1988 『柏木川8遺跡 柏木川13遺跡』。
 0203 恵庭市教育委員会 1988 『中島松6・7遺跡』。
 0204 恵庭市教育委員会 1989 『カリンバ2遺跡 第I地点における調査』。
 0205 恵庭市教育委員会 1989 『中島松5遺跡 A地点』。
 0206 恵庭市教育委員会 1990 『柏木川11遺跡』。
 0207 恵庭市教育委員会 1990 『中島松5遺跡B地点 中島松7遺跡C地点』。
 0208 恵庭市教育委員会 1991 『南島松1遺跡 南島松4遺跡』。
 0209 恵庭市教育委員会 1992 『中島松1遺跡 南島松4遺跡 南島松3遺跡 南島松2遺跡』。
 0210 恵庭市教育委員会 1992 『西島松17遺跡 西島松18遺跡』。
 0211 恵庭市教育委員会 1994 『ユカンボシE5遺跡 低地面における調査』。
 0212 恵庭市教育委員会 1997 『茂漁4遺跡』。
 0213 恵庭市教育委員会 1997 『茂漁5遺跡』。
 0214 恵庭市教育委員会 1998 『カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』。
 0215 恵庭町・恵庭町教育委員会 1966 『恵庭遺跡』。
 0216 北海道埋蔵文化財センター 1992 『ユカンボシE4遺跡』。
 0217 北海道埋蔵文化財センター 1998 『ユカンボシE10遺跡』。

千歳市

- 0301 千歳市教育委員会 1974 『ウサクマイ遺跡—B地点発掘報告書』。
 0302 千歳市教育委員会 1977 『ウサクマイ遺跡—N地点発掘報告書』。
 0303 千歳市教育委員会 1978 『苗別川流域における考古学的調査』。
 0304 千歳市教育委員会 1978 『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』。
 0305 千歳市教育委員会 1979 『続千歳遺跡』。
 0306 千歳市教育委員会 1979 『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』。
 0307 千歳市教育委員会 1981 『末広遺跡における考古学的調査(上)』。
 0308 千歳市教育委員会 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』。
 0309 千歳市教育委員会 1985 『末広遺跡における考古学的調査(続)』。
 0310 千歳市教育委員会 1986 『梅川3遺跡における考古学的調査』。
 0311 千歳市教育委員会 1995 『ウサクマイN・蘭越7遺跡における考古学的調査』。
 0312 千歳市教育委員会 1996 『末広遺跡における考古学的調査Ⅳ』。
 0313 千歳市教育委員会 2002 『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』。
 0314 千歳市教育委員会 2002 『梅川4遺跡における考古学的調査』。
 0315 千歳市考古学研究会・千歳市教育委員会 1971 『ママチ遺跡』。
 0316 千歳市・千歳市教育委員会 1967 『千歳遺跡』。
 0317 北海道埋蔵文化財センター 1982 『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』。
 0318 北海道埋蔵文化財センター 1982 『美沢川流域の遺跡群Ⅵ』。
 0319 北海道埋蔵文化財センター 1982 『美沢川流域の遺跡群Ⅸ』。
 0320 北海道埋蔵文化財センター 1987 『ママチ遺跡Ⅲ』。
 0321 北海道埋蔵文化財センター 1988 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ』。
 0322 北海道埋蔵文化財センター 1989 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅡ』。
 0323 北海道埋蔵文化財センター 1990 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』。
 0324 北海道埋蔵文化財センター 1992 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ』。
 0325 北海道埋蔵文化財センター 1993 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ』。

塚 本 浩 司

- 0326 北海道埋蔵文化財センター 1994 『ユカンボシ C 2 遺跡』。
0327 北海道埋蔵文化財センター 1994 『美沢川流域の遺跡群 X VII』。
0328 北海道埋蔵文化財センター 1995 『オサツ 2 遺跡(1)・オサツ14遺跡』。
0329 北海道埋蔵文化財センター 1996 『オサツ 2 遺跡(2)』。
0330 北海道埋蔵文化財センター 1997 『キウス 5 遺跡(3)』。
0331 北海道埋蔵文化財センター 1998 『ユカンボシ C15遺跡(1)』。
0332 北海道埋蔵文化財センター 2000 『ユカンボシ C15遺跡(3)』。
0333 北海道埋蔵文化財センター 2001 『ユカンボシ C15遺跡(4)』。
0334 北海道埋蔵文化財センター 2001 『ウサクマイ N 遺跡』。
0335 北海道埋蔵文化財センター 2002 『チプニー 1 遺跡・チプニー 2 遺跡』。

江別市

- 0401 江別市教育委員会 1981 『元江別遺跡群』。
0402 江別市教育委員会 1989 『大麻17遺跡』。

三笠市

- 0501 石井 淳 1998 「三笠市桂沢出土の擦文土器」『北海道考古学』第34輯, 111-116。

芦別市

- 0601 空知地方史研究協議会 1974 『芦別市の先史遺跡』。

〔道央太平洋沿岸〕

浦河町

- 0701 浦河町教育委員会 1969 『浦河町の遺跡』。
0702 谷岡康孝・下斗米啓明 1977 「浦河町上野深遺跡発掘調査概報」『北海道考古学』第13輯, 45-57。

門別町

- 0801 門別町教育委員会 1979 『日高門別の先史遺跡』。
0802 門別町教育委員会 1987 『エサンヌップ 4 遺跡』。

平取町

- 0901 平取町遺跡調査会 1989 『イルエカシ遺跡』。
0902 平取町遺跡調査会 1990 『額平川 2 遺跡』。
0903 平取町教育委員会 1995 『ピバウシ 2 遺跡』。
0904 平取町教育委員会 1995 『荷負 2 遺跡』。
0905 平取町教育委員会 1996 『カンカン 2 遺跡』。
0906 平取町・平取町教育委員会 1987 『二風谷小学校校庭遺跡』。
0907 北海道埋蔵文化財センター 1986 『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』。
0908 室蘭開発建設部・平取町 1987 『二風谷遺跡』。

鶴川町

- 1001 大場利夫・扇谷昌康 1964 「勇払郡鶴川遺跡」『北方文化研究報告』第一九輯, 169-257。

穂別町

- 1101 穂別町教育委員会 1979 『穂別第 5 遺跡』。

早来町

- 1201 北海道胆振支庁経済部耕地課・苫小牧市経済部農業水産課・苫小牧市教育委員会社会教育部
1978 『植苗久米井遺跡発掘調査報告書』。

苫小牧市

- 1301 苫小牧市教育委員会 1969 『高丘遺跡発掘調査報告書』。

擦文時代の遺跡分布の変遷について

- 1302 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1984 『タブコブ』。
1303 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1985 『ニナルカ』。
1304 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1986 『柏原24遺跡』。
1305 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群
V』。
1306 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1997 『柏原5遺跡』。

白老町

- 1401 名取武光・峰山 巖 1962 「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』第一七輯, 107-145。

室蘭市

- 1501 室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館 1962 『室蘭遺跡』。

伊達市

- 1601 伊達市教育委員会 1984 『南有珠7遺跡発掘調査報告』。
1602 伊達市教育委員会 1986 『有珠善光寺2遺跡』。
1603 伊達市教育委員会 1989 『有珠善光寺2遺跡II』。
1604 伊達市教育委員会 1993 『有珠オヤコツ遺跡・ポンマ遺跡』。
1605 伊達市教育委員会 1999 『ポンマ』。
1606 北海道埋蔵文化財センター 1990 『牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡』。

虻田町

- 1701 虻田町教育委員会 1998 『高砂貝塚』。
1702 虻田町教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1990 『入江遺跡』。

豊浦町

- 1703 北大解剖教室調査団 1963 「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』第一八輯, 179-287。
1704 松田宏介 2002 「小幌洞窟遺跡出土擦文土器の再検討」『北大史学』第四十二号, 1-24。

八雲町

- 1801 北海道埋蔵文化財センター 2002 『栄浜1遺跡』。
1802 八雲町教育委員会 1992 『コタン温泉遺跡』。

森町

- 1901 森町教育委員会 1985 『御幸町』。

上磯町

- 2001 上磯地方史研究会 1990 『東浜遺跡とその周辺』。
2002 国立歴史民俗博物館 2002 『落合計策縄文時代遺物コレクション』。

〔石狩川上流〕

深川市

- 2101 深川市教育委員会 1997 『東納内遺跡』。
2102 深川市教育委員会 1999 『境川左岸遺跡 北区1遺跡』。
2103 深川市教育委員会 2000 『発掘および工事立会調査報告書 東広里遺跡 納内6丁目付近遺跡』。
2104 深川市役所 1977 『深川市史』。
2105 北海道教育委員会 1977 『東納内2遺跡発掘調査報告書』。
2106 北海道埋蔵文化財センター 1988 『内園2遺跡』。
2107 北海道埋蔵文化財センター 1989 『納内6丁目付近遺跡』。
2108 北海道埋蔵文化財センター 1989 『東広里遺跡』。
2109 北海道埋蔵文化財センター 1989 『納内3遺跡』。
2110 北海道埋蔵文化財センター 1990 『納内6丁目付近遺跡II』。

塚本浩司

旭川市

- 2201 旭川市教育委員会 1984 『錦町5遺跡』。
2202 旭川市教育委員会 1984 『北門町3遺跡』。
2203 旭川市教育委員会 1985 『錦町5遺跡Ⅱ』。
2204 旭川市教育委員会 1985 『緑町4遺跡』。
2205 旭川市教育委員会 1985 『永山4遺跡』。
2206 旭川市教育委員会 1988 『錦町5遺跡Ⅲ』。
2207 旭川市教育委員会 1991 『末広7遺跡』。
2208 旭川市教育委員会 1998 『永山4遺跡Ⅲ』。
2209 齊藤 傑 1971 「旭川市近文町発見の擦文土器」『市立旭川博物館 博物館だより』4, 3。
2210 齊藤 傑 1973 「旭川市神居古潭の擦文土器」『市立旭川博物館 博物館だより』8, 3。
2211 佐藤忠雄 1961 「カムイコタン」『民俗学研究』VOL26, No. 1, 58-62。
2212 瀬川拓郎 1995 「旭川市旭町1遺跡発掘調査報告Ⅰ」『旭川市博物館研究報告』第1号, 35-66。
2213 瀬川拓郎・友田哲弘 1996 「旭川市旭町1遺跡発掘調査報告Ⅱ」『旭川市博物館研究報告』第2号, 45-66。
2214 北海道歴史教育研究会 1960 『北海道の先史文化』。

〔日本海沿岸中部〕

浜益村

- 2301 浜益村役場・浜益村教育委員会・浜益村文化財調査委員会 1961 『濱益遺跡』。

厚田村

- 2401 宇田川洋 1965 「厚田村聚富士上遺跡発掘調査概報」『アイヌ・モシリ』第10号, 17-21。

石狩市

- 2501 石狩市教育委員会 1975 『Wakkaoi』。

小樽市

- 2601 小樽市教育委員会 1985 『忍路11遺跡』。
2602 小樽市教育委員会 1990 『蘭島遺跡』。
2603 小樽市教育委員会 1991 『蘭島餅屋沢遺跡』。
2604 小樽市教育委員会 1991 『史跡 手宮洞窟』。
2605 小樽市教育委員会 1992 『チブタシナイ遺跡』。
2606 小樽市教育委員会 1994 『餅屋沢・蘭島・忍路24・チブタシナイ2遺跡発掘調査報告書』。
2607 小樽市教育委員会 1995 『忍路5遺跡』。

余市町

- 2701 余市町教育委員会 1999 『入舟遺跡における考古学的調査』。
2702 余市町教育委員会 2000 『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ』。
2703 余市町教育委員会 2000 『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』。
2704 余市町教育委員会 2000 『大川遺跡における考古学的調査Ⅲ』。
2705 余市町教育委員会 2000 『入舟遺跡(1998・1999年度)』。
2706 余市町教育委員会 2001 『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』。
2707 余市町教育委員会 2001 『大川遺跡(1999年度)』。
2708 余市町教育委員会・余市町郷土研究会 1961 『大川遺跡』。

仁木町

- 2801 北海道埋蔵文化財センター 1990 『モンガク丘陵の遺跡群』。

擦文時代の遺跡分布の変遷について

古平町

2901 古平町教育委員会 1995 『浜町遺跡』。

神恵内村

3001 小樽市博物館 1982 『観音2号洞窟遺跡発掘調査報告書』。

3002 宇田川洋・河野本道 1984 「神恵内村観音洞窟遺跡の遺物—1960年度北海道学芸大学考古学研究会調査分—」河野広道博士没後二十年記念論文集刊行会『河野広道博士没後二十年記念論文集』pp. 227-252, 札幌：北海道出版企画センター。

3003 神恵内村教育委員会 1984 『神恵内観音洞窟』。

3004 千代 肇 1984 「積丹半島神恵内観音洞窟の調査」河野広道博士没後二十年記念論文集刊行会『河野広道博士没後二十年記念論文集』pp.299-318, 札幌：北海道出版企画センター。

泊村

3101 泊村教育委員会 1985 『洪井遺跡発掘調査報告書』。

3102 泊村教育委員会 1996 『堀株神社遺跡発掘調査報告書』。

3103 泊村教育委員会 1997 『ヘロカルウス遺跡 E~G 地点』。

3104 泊村教育委員会 1998 『ヘロカルウス遺跡群』。

3105 北海道文化財研究所 1987 『ヘロカルウス遺跡』。

3106 北海道文化財研究所 1992 『堀株1・2遺跡』。

共和村

3201 小樽市博物館 1963 『発足岩陰遺跡』。

3202 北海道文化財研究所 1986 『宮丘1遺跡』。

岩内町

3301 岩内町・岩内町教育委員会 1958 『岩内遺跡』。

寿都町

3401 寿都町教育委員会 1980 『寿都町文化財調査報告書Ⅱ』。

3402 寿都町教育委員会 1985 『寿都町文化財調査報告書Ⅲ』。

3403 寿都町・寿都町教育委員会 1963 『寿都遺跡』。

島牧村

3501 島牧村教育委員会 1985 『チャランケシャシ発掘調査報告書』。

〔日本海沿岸北部〕

留萌市

3601 福土廣志 1990 「留萌市内の遺跡と出土遺物—留萌市海のふるさと館収蔵品を中心として—」『留萌市海のふるさと館紀要』創刊号, 73-107。

3602 留萌市教育委員会 1983 『三泊漁港遺跡』。

小平町

3701 小平町・小平町教育委員会 1985 『高砂遺跡第二地点発掘調査報告』。

3702 小平町教育委員会・留萌土木現業所 1983 『おびらたかさご』。

3703 小平町教育委員会・留萌土木現業所 1983 『おびらたかさごⅡ』。

苫前町

3801 苫前町教育委員会 1987 『香川三線遺跡』。

3802 苫前町教育委員会 1988 『香川6線遺跡 香川三線遺跡』。

羽幌町

3901 札幌西校郷土研究部 1955 『郷土の今昔』7。

3902 関 秀志・街道重昭 1968 「羽幌町天売遺跡発掘調査概報」『北海道考古学』第4輯, 128-131。

塚本浩司

3903 関秀志・街道重昭 1969 「昭和43年度羽幌町天売遺跡発掘調査概報」『北海道考古学』第5輯, 59-65。

3904 羽幌町教育委員会 1972 『チライベツ遺跡』。

3905 羽幌町役場 1968 『羽幌町史』。

3906 福田正宏・高橋健・高瀬克範・塚本浩司・佐藤昌俊・齋藤瑞穂・山口大介 2002 「北海道日本海沿岸地域における考古学的調査(1999・2000年度)」『利尻研究』第18号, 93-130。

初山別村

3907 初山別村教育委員会 1969 『初山別遺跡発掘調査報告』。

天塩町

4001 街道重昭・川内谷修 1991 「天塩町川口基線遺跡」『文京台考古』第6号, 33-39。

4002 河野本道 1964 「天塩町川口基線遺跡の発掘調査資料報告<図版による資料紹介>」『アイヌ・モシリ』第7・8合併号, 22-48。

4003 天塩町教育委員会 1971 『天塩川口遺跡』。

4004 天塩町教育委員会 1976 『天塩川口遺跡 1975』。

4005 天塩町教育委員会 1979 『天塩川口遺跡 1978』。

4006 天塩町教育委員会 1984 『天塩町における考古学的調査』。

4007 天塩高等学校史料部 1979 「天塩川口遺跡の発掘調査(その2)出土遺物について」『テッシュ』4号。

豊富町

4101 児玉作左衛門・大場利夫 1959 「天塩国豊富遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』第十四輯, 133-180。

稚内市

4201 大場利夫・大井晴男編 1973 『オンコロマナイ貝塚』(オホーツク文化の研究1) 東京: 東京大学出版会。

4202 稚内市教育委員会 1964 『稚内・宗谷の遺跡』。

4203 稚内市教育委員会 1972 『稚内・宗谷の遺跡(続)』。

4204 稚内市教育委員会 1986 『豊岩5遺跡・豊岩7遺跡』。

4205 稚内市教育委員会 1993 『声問川大曲遺跡』。

4206 稚内市教育委員会 2001 『声問川右岸1・2遺跡』。

利尻富士町

4301 岡田淳子・宮塚義人・梶田光明・西谷栄治ほか 1984 「利尻島の埋蔵文化財(2)」『利尻町立博物館年報』第3集, 9-50。

利尻町

4401 種屯内遺跡調査団 1999 「種屯内遺跡第3次発掘調査概要(1997年)」『利尻研究』第18号, 107-141。

礼文町

4501 大井晴男 1972 「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について—擦文文化とオホーツク文化の関係について, 補論2—」『北方文化研究』第6号, 1-36。

4502 大場利夫・大井晴男編 1976 『香深井遺跡 上』(オホーツク文化の研究2) 東京: 東京大学出版会。

4503 礼文町教育委員会 1986 『重兵衛沢2遺跡』。

4504 礼文町教育委員会 1992 『浜中2遺跡の発掘調査』。

4505 礼文町教育委員会 2000 『香深井5遺跡発掘調査報告書(2)』。

4506 礼文町教育委員会 2001 『香深井6遺跡発掘調査報告書』。

擦文時代の遺跡分布の変遷について

[オホーツク海沿岸]

美深町

- 4601 美深町教育委員会 1970 『紋穂内遺跡』。
4602 北海道埋蔵文化財センター 1984 『楠遺跡』。

名寄市

- 4701 名寄市教育委員会 1979 『智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』。
4702 名寄市立図書館 1968 『智東遺跡 B 地点』。

浜頓別町

- 4801 大場利夫・菅 正敏 1977 「枝幸郡浜頓別町日の出遺跡調査報告」『北海道考古学』第13輯，
59-77。

枝幸町

- 4901 枝幸町 1967 『枝幸町史 上巻』。
4902 枝幸町教育委員会 1980 『ホロナイボ遺跡』。
4903 枝幸町教育委員会 1981 『ホロナイボ遺跡Ⅱ』。
4904 枝幸町教育委員会 1983 『ウエンナイ 2 遺跡』。
4905 枝幸町教育委員会 1985 『ホロベツ砂丘遺跡』。
4906 枝幸町教育委員会 1994 『目梨泊遺跡』。
4907 枝幸町教育委員会 1999 『落切川左岸遺跡』。

雄武町

- 5001 佐藤和利 1976 「北海道オホーツク海沿岸のオホーツク文化期の遺物（資料紹介）」『もうべつと』No. 7, 49-59。
5002 道北先史文化調査団・名寄郷土史研究会 1965 『開生遺跡』。
5003 北海道開拓記念館 1995 『雄武堅穴群遺跡』。

紋別市

- 5101 堅田 直・石附喜三男 1978 「紋別市栄遺跡の発掘調査」『もうべつと』No. 9, 39-48
5102 紋別市教育委員会 1980 「紋別市ウブナイ遺跡の発掘調査報告」『もうべつと』No.11, 3-58。
5103 紋別市教育委員会 1988 『オムサロ台地堅穴群』。

遠軽町

- 5201 遠軽町教育委員会 1972 『寒河江遺跡』。
5202 遠軽町教育委員会 1994 『寒河江遺跡—3・4・2 停車場道路改良工事及び公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』。

佐呂間町

- 5301 佐呂間町教育委員会 1990 『HS-06遺跡』。
5302 佐呂間町教育委員会 1991 『浜佐呂間Ⅰ遺跡 HS-05遺跡』。

常呂町

- 5401 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 1995 『ライトコロ右岸遺跡』。
5402 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 2001 『トコロチャシ跡遺跡』。
5403 東京大学文学部 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻』。
5404 東京大学文学部 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』。
5405 東京大学文学部 1972 『常呂』。
5406 東京大学文学部 1977 『岐阜第三遺跡』。
5407 東京大学文学部 1980 『ライトコロ川口遺跡』。
5408 東京大学文学部 1985 『栄浦第一遺跡』。
5409 常呂町 1976 『トコロチャシ南尾根遺跡』。

塚本浩司

- 5410 常呂町 1977 『岐阜第二遺跡—道宮畑総事業に伴う事前調査報告—』。
5411 常呂町 1982 『岐阜第二遺跡—1981年度—』。
5412 常呂町 1983 『栄浦地区遺跡詳細分布調査報告書』。
5413 常呂町教育委員会 1983 『TK07遺跡』。
5414 常呂町教育委員会 1986 『トコロチャシ南尾根遺跡—1985年度—』。
5415 常呂町教育委員会 1988 『TK67遺跡』。
5416 常呂町教育委員会 1993 『史跡 常呂遺跡』。
5417 常呂町教育委員会 1995 『栄浦第二・第一遺跡』。
5418 常呂町教育委員会 1996 『常呂川河口遺跡(1)』。
5419 常呂町教育委員会 2000 『常呂川河口遺跡(2)』。
5420 常呂町教育委員会 2002 『常呂川河口遺跡(3)』。

端野町

- 5501 常呂川流域史研究会 1982 『広瀬遺跡』。

北見市

- 5601 大塚和義 1966 「関恵冶氏採集の考古学的遺物」『Field』No. 3。
5602 大塚和義 1967 「北見市川田遺跡出土の遺物」『Field』No. 4。
5603 大場利夫・近堂祐弘・豊田宏良・宮 宏明 1984 「北上平地遺跡の発掘調査と当該遺物」『北見郷土博物館紀要』第15集, 30-53。
5604 北見市 1978 『中ノ島遺跡発掘調査報告書』。
5605 北見市 1982 『開成4遺跡』。
5606 北見市教育委員会 1989 『南町遺跡Ⅰ』。
5607 北見市教育委員会 1991 『南町遺跡Ⅱ』。
5608 北見市教育委員会 1992 『南町遺跡Ⅲ』。
5609 北見市教育委員会 1993 『南町遺跡Ⅳ』。
5610 北見市教育委員会 1994 『南町遺跡Ⅴ』。
5611 北見市教育委員会 1995 『川東15遺跡』。

網走市

- 5701 網走向陽高校郷土史研究クラブ 1966 『北浜イナウシ堅穴群発掘調査報告書』。
5702 網走市教育委員会 1986 『嘉多山遺跡』。
5703 網走市教育委員会 1993 『嘉多山3遺跡 嘉多山4遺跡』。
5704 網走市教育委員会 1991 『大曲2遺跡』。
5705 大場利夫 1961 「モヨロ貝塚出土の土器 二」『北方文化研究報告』第一六輯, 143-178。
5706 北方民族博物館 1999 『ノトロ岬周辺の遺跡』。
5707 松尾 隆 1998 「「能取岬西岸遺跡」拾遺」『北海道考古学』第34輯, 105-110。
5708 米村喜男衛 1950 『モヨロ貝塚資料集』網走・東京：網走郷土博物館・野村書店。

女満別町

- 5801 女満別町・女満別町教育委員会・女満別町郷土保勝会 1960 『女満別遺跡』。

美幌町

- 5901 美幌町教育委員会 1986 『元町2遺跡』。

斜里町

- 6001 斜里町教育委員会 1970 『ピラガ丘遺跡』。
6002 斜里町教育委員会 1972 『ピラガ丘遺跡—第Ⅱ地点発掘調査概報—』。
6003 斜里町教育委員会 1976 『ピラガ丘遺跡—第Ⅲ地点発掘調査報告—』。
6004 斜里町教育委員会 1977 『ウナベツ川遺跡』。

擦文時代の遺跡分布の変遷について

- 6005 斜里町教育委員会 1981 『斜里町文化財調査報告Ⅰ』。
6006 斜里町教育委員会 1993 『オシヨコマナイ河口東遺跡 オタモイ1遺跡発掘調査報告書』。
6007 斜里町教育委員会 1993 『オンネベツ川西側台地遺跡発掘調査報告書』。
6008 斜里町教育委員会 1995 『オシャマツ川遺跡発掘調査報告書』。
6009 斜里町教育委員会 2001 『トーツル沼1遺跡発掘調査報告書』。

〔道東太平洋沿岸〕

大樹町

- 6101 大樹町・大樹町教育委員会 1965 『大樹遺跡』。

浦幌町

- 6201 赤沢 威 1967 「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」『人類学雑誌』第七十五卷第二号，10-26。
6202 浦幌町教育委員会 1974 『十勝太若月一第二次発掘調査一』。
6203 浦幌町教育委員会 1975 『十勝太若月一第三次発掘調査一』。
6204 浦幌町教育委員会 1998 『十勝太海岸段丘遺跡』。

豊頃町

- 6301 宮 宏明 1982 「豊頃町十弗遺跡の竪穴群と採集遺物」『十勝考古』第5号，48-51。

池田町

- 6401 池田町教育委員会 1972 『池田町の先史文化』。
6402 池田町教育委員会 1993 『池田3遺跡』。

音別町

- 6501 音別町教育委員会 1984 『ノトロ岬』。
6502 富水慶一 1970 「白糠郡音別町の擦文文化遺跡調査概報」『北海道考古学』第6輯，71-85。

白糠町

- 6601 白糠町教育委員会 1968 『白糠町の先史文化 第二輯』。
6602 白糠町教育委員会 1968 『白糠町の先史文化 第三輯』。
6603 白糠町教育委員会 1969 『白糠町の先史文化 第四輯』。
6604 富水慶一 1969 「和天別川河口竪穴住居址群遺跡調査概要（第3次調査）」『北海道考古学』第5輯，49-58。

阿寒町

- 6701 阿寒町教育委員会 1963 『阿寒町の文化財 先史文化篇第一輯』。
6702 阿寒町教育委員会 1965 『阿寒町の文化財 先史文化篇第二輯』。
6703 阿寒町教育委員会 1983 『下仁々志別竪穴群』。

釧路市

- 6801 大井晴男 1972 「北海道東部における古式の擦文式土器について—擦文土器とオホーツク文化の關係について，補論1—」東京大学文学部『常呂』，433-446。
6802 釧路考古学研究会 1992 『東釧路第3遺跡・緑ヶ岡1遺跡』。
6803 釧路市教育委員会 1990 『幣舞遺跡調査報告書』。
6804 釧路市教育委員会 1992 『北斗遺跡Ⅱ』。
6805 釧路市教育委員会 1993 『北斗遺跡Ⅲ』。
6806 釧路市郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター 1979 『興津遺跡発掘報告Ⅲ』。
6807 釧路市埋蔵文化財調査センター 1989 『材木町5遺跡発掘調査報告書』。
6808 釧路市埋蔵文化財調査センター 1990 『材木町5遺跡発掘調査報告書Ⅱ』。
6809 釧路市埋蔵文化財調査センター 1995 『東釧路貝塚調査報告書』。

塚本浩司

- 6810 釧路市埋蔵文化財調査センター 1996 『幣舞遺跡調査報告書Ⅲ』。
6811 釧路市埋蔵文化財調査センター 1997 『鶴ヶ岱4遺跡調査報告書』。
6812 釧路市埋蔵文化財調査センター 1999 『幣舞遺跡調査報告書Ⅳ』。
6813 沢 四郎 1972 「釧路市緑ヶ岡STV遺跡発掘調査報告—第一次調査・第二次調査—」『釧路市郷土博物館紀要』第1輯。
6814 沢 四郎・宇田川洋 1969 「北海道東釧路遺跡の竪穴発掘調査」『考古学雑誌』第五十五卷第一号, 40-51。
6815 松田 猛 1980 「釧路地方の擦文土器について」『釧路市立郷土博物館紀要』第7輯, 49-56。

標茶町

- 6901 釧路川流域史研究会 1973 『釧路川流域の遺跡』。
6902 釧路川流域史研究会 1984 『トブー遺跡の発掘調査』。

弟子屈町

- 7001 弟子屈町教育委員会 1971 『下鎚別遺跡発掘報告』。
7002 弟子屈町教育委員会 1977 『矢沢遺跡調査報告—第1次調査—』。

釧路町

- 7101 釧路町教育委員会 1981 『別保川左岸I遺跡発掘調査報告書』。

厚岸町

- 7201 厚岸町教育委員会 1972 『下田ノ沢遺跡』。

浜中町

- 7301 浜中町教育委員会 1980 『浜中町埋蔵文化財分布調査報告—第3次報告—』。
7302 浜中町教育委員会 1983 『姉別川17遺跡発掘調査報告』。

根室市

- 7401 児玉作左衛門・大場利夫 1956 「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』第十一輯, 75-145。
7402 筑波大学歴史・人類学系 1980 『北海道東部地区の遺跡研究』。
7403 東京教育大学文学部 1966 『北海道根室の先史遺跡』。
7404 根室市教育委員会 1983 『西月ヶ丘遺跡発掘調査報告書』。
7405 根室市教育委員会 1994 『穂香竪穴群発掘調査報告書』。
7406 北海道埋蔵文化財センター 2002 『穂香竪穴群』。

別海町

- 7501 北地文化研究会 1972 『浜別海遺跡』。

標津町

- 7601 標津町教育委員会 1978 『標津の竪穴』。
7602 標津町教育委員会 1980 『標津の竪穴Ⅲ』。
7603 標津町教育委員会 1982 『伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書』。
7604 標津町教育委員会 1983 『標津の竪穴Ⅵ』。
7605 標津町教育委員会 1985 『標津の竪穴Ⅷ』。
7606 北地文化研究会 1973 『伊茶仁遺跡 1971~1972』。

羅臼町

- 7701 羅臼町教育委員会 1975 『幾田』。
7702 羅臼町教育委員会 1980 『舟見町高台遺跡』。
7703 羅臼町教育委員会 1991 『オタフク岩遺跡』。

擦文時代の遺跡分布の変遷について

〔道南日本海沿岸〕

瀬棚町

- 7801 加藤邦雄 1981 「瀬棚町発見の火葬墓について」『北海道考古学』第17輯, 91-113。
7802 瀬棚町教育委員会 1985 『瀬棚南川』。
7803 瀬棚町教育委員会 1985 『南川2遺跡』。

乙部町

- 7901 乙部町教育委員会 1977 『元和(続)』。
7902 久保 泰・森 広樹 1995 「渡島半島南部の擦文時代の防禦集落」『考古学ジャーナル』No.387, 27-33。
7903 宮下正司 1967 「檜山国乙部町出土の土師器坏」『Field』No. 4。

江差町

- 8001 江差町 『江差町史 第五卷通説一』。
8002 大沼忠春・佐藤隆広・江差高校考古学部 1976 「江差町厚沢部川河口遺跡の採集資料」『桧山考古学研究会会誌』5。
8003 上ノ国村教育委員会・江差町教育委員会 1955 『檜山南部の遺跡』。

上ノ国町

- 8101 上ノ国町教育委員会 1974 『四十九里沢A遺跡発掘報告書』。
8102 上ノ国町教育委員会 1996 『笹浪屋敷遺跡』。
8103 上ノ国町教育委員会 2001 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅳ』。
8104 上ノ国村・上ノ国村教育委員会 1961 『上ノ国遺跡』。
8105 藤田 登・宮塚義人 1981 「ワシリチャシ跡について」『北海道チャシ学会々報』No.10。

松前町

- 8201 久保 泰 1983 「静浦D遺跡と道南地方の擦文文化」『考古学ジャーナル』No.213, 33-36。
8202 松前町教育委員会 1975 『建石遺跡 大尽内遺跡発掘報告』。
8203 松前町教育委員会 1983 『白坂』。
8204 松前町教育委員会 1985 『札前』。
8205 松前町教育委員会 1989 『松前Ⅱ』。
8206 松前町教育委員会 1991 『松前Ⅲ』。
8207 松前町教育委員会 1993 『原口館』。
8208 松前町郷土資料館 1984 『松前町郷土資料館調査報告』第1集。

福島町

- 8301 福島町教育委員会 1972 『穩内館』。
8302 福島町教育委員会 1997 『吉岡遺跡』。

奥尻町

- 8401 奥尻町教育委員会 1981 『奥尻島青苗遺跡』。
8402 奥尻町教育委員会 1998 『青苗遺跡(E地区)』。
8403 奥尻町教育委員会 1999 『青苗B遺跡』。
8404 桜井清彦 1958 「北海道奥尻島青苗貝塚について(第一次調査概報)」『古代』第二七号, 1-8。
8405 佐藤忠雄 1979 「北海道西南部の擦文文化—青苗貝塚に見る終末期の資料—」『どるめん』二十二号, 68-80。
8406 千代 肇 1956 「北海道奥尻島遺蹟調査概報」『考古学雑誌』第四十一卷第二号, 49-58。
8407 函館土木現業所・奥尻町教育委員会 1979 『奥尻島青苗遺跡 図版編』。

塚本浩司

〔北海道〕

- 8501 宇田川洋編 1984 『河野広道ノート考古篇5—金属器・土器・石器—』札幌：北海道出版企画センター。
- 8502 大川 清 1998 『北海二島』那須郡馬頭町：窯業史博物館。
- 8503 空知地方史研究協議会 1977 『石狩川中流域の先史遺跡』。
- 8504 日高管内郷土史研究協議会・日高地方町教育委員会協議会・日高地方教育局 1967 『日高の文化財』第1集 [埋蔵文化財篇]。
- 8505 北海道開拓記念館 1999 『札幌西高等学校郷土研究部・奥野清介氏資料目録』。
- 8506 北海道文化財保護協会 1963 『北海道の文化』特集号。